

卒業式式辞「見えないものは永遠」(コリントの信徒への手紙 二 4 : 18)

ただ今一人ひとりに無事卒業証書をお渡しすることができ、とても嬉しく思っています。皆さんは、花のアーチをくぐってこの講堂に入ってきた入学式の日のことを覚えていますか。あの日保護者席では、今より6歳若いおうちの方がたが今日と同じように座って、びよこびよこ入場するかわいい制服姿を見守っていたらいいなと思いました。その皆さんが、個性がきらきら輝く素敵な6年生になり、小学部を巣立っていくのです。今日のこの喜びの日を、6年間変わらない愛とお恵みでお支えくださった神さまに、心から感謝をささげる日としましょう。

個性がきらきら輝いている、と言いましたが、皆さんは神さまからそれぞれに、かけがえのない賜物をいただいて生まれてきました。先生たちはその一つひとつの個性をとともいとおしく思い、大切にしてきました。全然個性が違う皆さんですが、最後の学芸会で力を合わせている姿など、それぞれの個性が合わさって成すハーモニーは素晴らしかったです。互いに思いやる力もありました。中学部に行ったら、皆さんのそうした素敵な力を使って、新しく東洋英和中学部生となるたくさんの友だちを大切に、仲間を増やして行ってください。そしてもっともっと東洋英和を素敵な学校にしてください。

さてちょうど昨日も小学部で、2011年に起きた東日本大震災のことを覚えての特別な礼拝がありました。6年生の皆さんは、大震災の時は幼稚園や保育園生でしたが、この6年間いつも被災地の方々のことを心に留め、お祈りしてくれましたね。クリスマスには小さな贈り物を被災地の方々に送り、毎月11日には震災を忘れないための祈りをささげ、また給食で、震災をおぼえるための東北地方の献立が出ていました。これは2011年からずっと小学部が続けていることです。皆さんは知らないのですが、震災から1年たった、震災をおぼえる東北地方の献立の日、小学部の給食にお客様が来てくださいました。宮城県気仙沼のホテルでお仕事をしている森さんという方です。実は今6年生は修学旅行で関西に行っていますが、7年前まで東北地方に行っていたのです。森さんは、震災の半年前に小学部6年生が修学旅行でお訪ねし、お世話になった気仙沼のホテルの方なのです。その日給食のお客様として紹介し、給食が目の前にあるので、すみません短く子どもたちにお話してください、と私がお願いしたら、森さんはそれでは…と、本当にとっても短くお話してくださいました。

「みんな楽しい思い出をいっぱい作ってください。目に見えるものはなくなってしまうても、思い出は残りますから、みんなはいい思い出をいっぱい作ってください。」

実は森さん、ご家族はみんな無事だったのですが、おうちが津波で流され、おうちの中の物はみんななくなり、土台だけになってしまったそうです。大切な物はなくなってしまうましたが、津波は人の心の思い出まで、さらっていくことはできません。森さんの心の中にきっと、小学校の頃の楽しかった思い出がいっぱい残っているのでしょう。だから小学部みんなに、どうしてもおっしゃりたかったのです。

「みんな楽しい思い出をいっぱい作ってください。目に見えるものはなくなってしまうても、思い出は残りますから。」

その年の『小羊』の中の6年生の作文にもありました。「地震や津波は、多くの命や、自然や町並みをうばいました。でもすべてをうばえたわけではありません。人が人を思う心、やさしはうばえません。目に見えるもののかげに隠れていてふだんは見えないけれども、それらがうばわれたことで、表に出てくるものもあると思います。」と書いています。とても大切なことに気づいていると思いました。私たちは目に見えるものに囲まれ、目に見えるものに頼って生活しています。家族、友人、仕事、家、お金、それらこそ大切に、かけがえがないものと思っています。でも東日本大震災でもわかるように、目に見えるものはなくなります。いつまでも永遠にあるものではないのです。しかし本日のみ言葉にありました。

「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」(コリント二4：18)

聖書が語る、目には見えない大切なもの、絶対になくなるならない、永遠なるもの…、小学部のみんなはもうわかっています。それは神さまですよね。神さまはいつも共にいてくださいます。そして実は私たちは、神さまから与えられる命と、お恵みと、憐れみがなければ、生きていけないのです。でも神さまは目に見えないので、人びとはこのことになかなか気づかないのです。

水野源三さんという、神さまを信じている詩人の方のお話をします。小さい頃の病気がもとで、手も足も、体じゅう動かさなくて、話すこともできません。水野さんはどうやって自分の言いたいことを人に伝えたいのでしょうか。ただ一つ水野さんが体を使ってできることは、目をつぶったり閉じたりすることです。たとえば「さむい」と言いたいとします。そうしたらお母さんが、「あいえおかきくけこ…」と

ひらがなが全部書かれている表を一つ一つ指さしていったら、お母さんの指が「さ」まで来た時、目をパチンとまばたきして、次は「む」の時、次は「い」の時、と合図して、「さむい」と言いたいことを伝えるのです。そのやり方で詩を作ったので、水野さんは「まばたきの詩人」と言われています。

水野さんが作った、「今日一日も」という詩を紹介します。

冷たい水のうまさに夏を感じ

新聞のにおいに朝を感じ

風鈴の音の涼しさに夕暮れを感じ

かえるの声ははっきりして 夜を感じ 今日一日も終わりぬ

一つ一つのことに 神様の恵みと愛を感じて

水野さんは、一つ一つのことに 神さまの恵みと愛を感じています。水野さんはほかの人たちが普通に行うことができません。でもすべてが取り去られたとき、神さまの与える本当の平安、変わらない喜びと希望、が残ることに気づいていらっしやるのです。

6年生の皆さんは小学部の学びの中で、目には見えない神さまの愛を感じ続けて育った子どもたちです。この後、目に見えるものによる絶望に遭遇したときにも、目に見えないものへの信頼によって強くあってほしいです。この後も、いつも水野さんのように、小さな一つ一つのことに神さまの恵みと愛を感じてほしいです。

最後になりましたが保護者の皆様、お嬢様のご卒業おめでとうございます。それぞれのご家庭に与えられた小さな命は、神さまからたくさん愛をいただいて、今日、一つの終わりのときを迎えています。ご一緒にこれまでのすべてを神さまに感謝し、これからの一人ひとりの行く末に、上からの祝福とお導きが豊かであることを祈っていきたいと思います。6年間の変わらない小学部へのご理解とご協力ありがとうございました。これからも学院のつながりの中で、小学部を見守り続けていただけたらと思っております。

卒業生の皆さん、私は皆さんを、誇りを持って小学部から送り出せる、という喜びでいっぱいです。どうか、いつも神さまから離れないで、神さまが備えてくださる道を進んで行ってください。

山本 香織